太平洋戦争後の十日戎開門神事

荒川　裕紀

TOKA-EBISU “Open Gate Ceremony” after Pacific War in Nishinomiya Shinto Shrine

ARAKAWA, Hironori

Abstract

TOKA-EBISU “Open Gate Ceremony”, which is Nishinomiya Shinto shrine’s annual ceremony held at 6:00AM, January 10th. After grand gate was opened, participants run from grand gate to main shrine (the distance is about 230m). After this competition, Nishinomiya shrine recognizes the persons from the 1st place to the 3rd place as "FUKU-OTOKO (Person with Happiness)". Nowadays, more than 6000 people participate in this ceremony, and this ceremony became the spectacular event in the Kansai area, Japan.

In this thesis, I traced the transition of the form of this ceremony after Pacific War to 1955(10 years later from Pacific War). Especially, I researched from newspaper materials and Nishinomiya Shrine office diary around 1945-1955, how this ceremony did change in a social structure from Pacific War. Also I mentioned what kinds of meanings were added to this ceremony during this period. In this report, I would tell what kind of people in Hanshin area did participate in this ceremony. Also I would like tell about how were this ceremony written in newspapers after Pacific War. These works would be proved actual state of this ceremony from the past to the future.

Key words: EBISU, FUKU-OTOKO, Open Gate Ceremony, Shinto, Shrine, Nishinomiya, Hanshin industrial area, Pacific War,

1、はじめに

私は、43 号の本研究報告において、兵庫県西宮神社で毎年 1 月 10 日に行われる「十日戎開門神事」の歴史的変遷、特に明治期から大正期の変遷について鉄道･電鉄といった氏子地域である西宮が産業化されていく側面と、改暦という歴史的事象の中から新暦での十日戎が生み出され、その中で「門開け」が新聞紙上において注目されてきたことを示した [1)]。

44 号では、その「門開け」が新聞紙上で多数登場するようになった 1930 年代、特に 1937 年（昭和 12 年）からの新聞（大阪朝日新聞・神戸新聞・大阪毎日新聞）記事を紹介し、そこから当時の門開けがどのような形で報道されていたのかについて紹介した。その中で、現在の開門神事がどのような語句で言い表されているのかを抽出した。また現在の福男の語句がいつ登場したのかを探り、それが大阪毎日新聞の 1939 年（昭和 14 年）からであることを明らかにした。そして 1945 年（昭和 20 年）の一番福であった上田研蔵氏へのインタビューから、当時の開門の状況、彼自身の参加動機などを探り、その後の人生においてどのような影響をおよぼしたのかということにも迫った。それらの中で明らかにしたのは、西宮神社の「忌籠（イゴモリ）まつり」を起源にしながらも、氏子地域である西宮の産業都市化、時代の変化によって、変容を遂げていったことである。このような時代的な流れの中で、当神事はイベントとして仕掛けられるようになっていったとも考えられるだろう。しかし、参加者の中にはそのイベントに彼ら個人の生活の中で欠かすことのできない年中行事と認識して参加した者もいたことを同時に挙げた [2)]。

今回の論考においては、1930 年代･40 年代には戦争との関わりと文脈で語られることも多かった十日戎が、1945 年の敗戦によってどの様に変容していったかを探る。武運長久を祈願していた十日戎はどの様に変容したのか。そして、西宮空襲によって、甚大な被害を受けた西宮神社がどの様に復興していったのかを報告する。

さらにその十日戎のメインイベントであった「門開け」が、どの様に新聞紙上に再登場したのかについても述べる。当時の門開け行事の参加者のインタビューなども加え、阪神間の全体の歴史的変遷と重ねることで当神事の復興の道筋を明らかにしたい。そこから現代の十日戎開門神事へといたる中で、どのようなものが十日戎の祭事の意味として付加されていったのかについての考察と予測を行うこととする。

次回以降の課題を明らかにする意味でも、前論考で探った「福」「福男」「開門神事」などの語句が、まず昭和２０年代の新聞紙上にて、誰がどの様な文脈において使用したのかを探る。十日戎にどのような人々が参加しているのか、そこでどのような場が形成されていたのかについての考察を行う。前回の論考などをより深めて、多角的な視点からの開門神事の理解につとめたい。

2、戦争による被害、そして戦時中の門開けの主役たち

1945 年 1 月 10 日に「防空服装で戦勝祈願の決戦色氾濫」した十日戎が催行された [3]後、阪神工業地帯の中心都市でもあった西宮市は米軍によって大きく分けて 5 回の空襲を受けた。第 1 回目は 1945 年 5 月 11 日、第 2 回目は同年 6 月 5 日、第 3 回目は 6 月 15 日、第 4 回は 7 月 24 日、そして第 5 回目 8 月 5 日から翌 6 日にかけてである。B29 を主体とした爆撃機隊に対し、日本軍は海軍航空隊が伊丹の陸軍航空隊基地や鳴尾村 [4]の基地から迎撃を行っていたが、物量的に圧倒的優勢を誇るアメリカ空軍に対しては、ほとんど戦果を挙げることができなかった [5]。特に西宮神社は、終戦わずか 10 日前にそれまでよりも多くの被害を出したといわれる第 5 回の空襲において、甚大な被害を受けることとなった。『西宮市史　第三巻』では、当時の空襲は次のように書かれている [6]。

「まず 8 月 5 日午後 10 時ころ空襲警報が発令されたが、これはまもなく解除された。ところが午後 12 時前になってふたたび警戒警報がだされ、ついでに空襲警報が発令され数機編隊で波状攻撃が加えられ、文字どおり焼夷弾・爆弾の雨がふった。火柱は市中いたるところに立ちのぼり、猛烈な火炎が夜空をこがして、爆発音や対空砲火がとどろいた。警防団・隣組防空隊などの組織をとおして、市民は防火にめざましい活動を示したが、物量をほこる波状攻撃に対しては、ほとんど効果を挙げなかった。かくて恐怖の一夜が明けると、市の南部市街地はほとんど全滅するという悲惨な姿に変わっていった。」

西宮神社の惨状は以下の様であった。

「西宮神社は 8 月 6 日の第 5 回空襲によって貴重な文化財を失った。すなわち境内 1 万余坪（約 330 ヘクタール）のうちに小型爆弾 2 発、焼夷弾 300 発以上が落下し、神社職員および付近住民が消火に尽力したが、国宝建造物に指定されていた三連春日造り本殿が全焼した。同じく国宝の大練塀も約 94 間（169.2 メートル）にわたって瓦屋根および棰（たるき）を消失したため、雨露にさらされて荒廃の危険が迫り、西宮神社の特色ある構築物だけに、心ある市民の憂慮をまねいた。[7]　」

とある。社務日誌では次のような記載である。[8]

「昭和二十年八月六日　五日夜十時前ヨリ警戒警報ニ入リ、最早例ノ如ク脱去ノコト考ヘラレシニ、形勢逆転、再ビ空襲トナリ、敵機当市上空ヲ中心トシテ百三十機。大凡焼夷弾ヲ以テ全市ニ亘リ攻撃セリ、時ハ午前一時乃至三時頃ナリ、境内一面熱火ノ巷トナリ、林間ニ篝火ヲ点セル如ク危険言フハカリナシ、御神体安全ヲ慥カメ各職員壕ニ避難、更ニ劫火ノ猛烈トナルニ及ンデ表門ニ避難ス、社掌以下水ヲ以テ消火セルモノ数個アリシモ、降下ノ数量何千発トイフニ至ツテハ遂ニ何ノ功ヲモ表ハスヲ得ズ、国宝本殿ヲ初メ拝殿、回廊、両渡廊、神饌所、社務所、儀式殿、大練塀上屋、沖戎社、南門等ヲ悉ク烏有ニ帰スルニ至リシハ、実ニ有史以来ノ一大事ナルト共ニ大敵米軍ノ悪業憎ミテモ憎ミテモ尽クル所ヲ知ラザルナリ、消防隊モ来ラズ、劫火ハ次第々々ニ燃エサカル一方ナリ、斯クテハ手ノ施スベキヤウモナシ、社掌（吉井良尚）ハ突嗟ニ浜脇学校ニ走リ暁部隊ヲ依頼シ、武藤時宗見習士官指揮、南門消落後ノ火ノ手ガ西風ニ副ヒ練塀上屋ノ東ヲ伝ヒテ東大門（表大門のこと）ニ移ラントスル火ノ手ヲ防止スルニ至ラシメハ大功ナリ、全部鎮火ハ午前六～七時頃ニモ及ビツランカ」

社掌（宮司）の吉井良尚氏が、必死に消しとめ、それでも間に合わず南にある浜脇小学校駐留の部隊に頼み込んで、鎮火してもらい、そのこともあって表大門がなんとか残ったことがよく分かる。実際表大門のあと少しのところまで、火の手がきていることがうかがい知ることができ、門まで焼き落ちてしまっていたら、今の十日戎開門神事の隆盛が果たしてあったのとも考えてしまう。

本殿・拝殿の復旧には 1961 年（昭和 36 年）までかかることとなる。太平洋戦争後の翌年の昭和 21 年からの昭和 20 年代は本殿、拝殿が復旧していない状態で十日戎を迎えていたことになる [9]。近代から行われてきた、神社内を「忌籠り」の状態に置くことも、大練塀の被災 [10]によって難しかった。

私は、前回と前々回の報告（「北九州工業高等専門学校研究報告」第 43 号、および第 44 号）の中で西宮の産業都市化によって十日戎は変化を遂げ、その中の中心的な恒例行事として「門開け」が毎年新聞の地方欄を飾ることにもなっていったことを述べた。そしてその過程の中で「一番福」や「福男」の語が生み出されたことを紹介した。それらの視点に加えて、もう一点着目したい。

それは十数回一番福を繰り返した田中太一氏は青年団の活動 [11]を行っており、1939 年（昭和 14 年）に二番福となった多司馬園之助氏（その年の一番福の多司馬玖一氏の実兄）は在郷軍西宮分会の役員であったことである。

十日戎

福男一番乘りも朗らかでした

今年の福男、一ツ家重治君が第一番に神前の鈴綱を鳴らんが間一円内は一ツ家君

図 1：一ツ家重治氏（大阪毎日新聞　1941 年 1 月 11 日）

1941年（昭和16年）の一番福であった一ツ家重治氏に関しては、以下の様な記述が1941年（昭和16年）1月11日の大阪毎日新聞阪神版にある。

「・・・開門一瞬この群衆は怒涛のごとく約２百メートル距てた神前の鈴の緒をめがけて参道を爆走、中央鈴を最初に摑んだ幸運はつひに西宮市今在家町一六佐々木時計店員一ツ家重治君（二三）が獲得、（中略）福男一ツ家君は西宮市今在家町青年団のマラソンの選手、昨年２月から毎朝廣田神社までマラソンの練習をしてゐるといふ快足の主、同君は「朝の二時半に駆けつけました、前から三人目ぐらゐのところで待つてゐましたが、後から押されて身体が潰れるやうでした、扉があいてから鈴縄をつかむまで全く夢中でしたよ・・・」と語るのも福男らしくうれしさうだつた」

同日の大阪朝日新聞阪神版にも

「・・・一ツ家重治君は西宮市今在町一六に時計店を経営する元同市税務課長佐々木榮氏方の店員で快活な青年、小学校の時から走るのが好きで常に学校の選手だつたが佐々木時計店へ来てからも忽ち町内青年団の選手になつた、一昨年九月市聯合青年団主催の神社訪問競争には見事二等を獲得、つひに聯合青年団代表として県下の大会にも出場したことがある・・・」

とある。これらからも分かるように、産業都市化していく中で、担い手として他地域からやってきた人たちが「町内青年団」に所属することがおこった。もしくは、徴兵され帰還することで西宮市の在郷軍人となって新しい祭を盛りたてるメンバーとなったりする参加者も出現したのだろう。産業化によって、それまでの氏子組織を形成する構成員でなかった人々がその中に取り込まれ、戦時中の十日戎に彩りを与えていたことは紛れもない事実である。

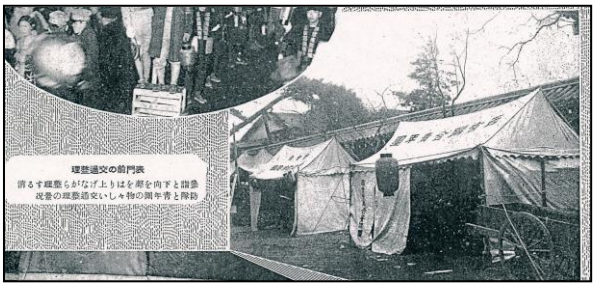

図2：1934年（昭和9年）西宮神社十日戎絵巻より青年団テントの写真

図3：1934年（昭和9年）西宮神社十日戎絵巻より当時の開門神事

社殿などが、空襲によって物理的になくなり、敗戦という社会的な大きな変動によって、これまで積み上げられてきた組織としても改変があったことが考えられる。その中で、神社関係者がどのような十日戎を行い、そしてどのような形で参拝者が西宮神社に参詣に来ていたのか、そして開門神事がどの様に行われていたのかを新聞資料から見ていきたい。

3、戦後の十日戎の復興、福引、福アメの登場

十日戎自体は、1946年（昭和21年）に新聞紙上には現われている。1946年1月9日の神戸新聞には初めて十日戎について言及した記事が出る。

「十日ゑびす　臨時停留所を設置　福の神として例年一月九日から十一日まで三日間の十日戎祭に多数の参詣客を集めて賑はふ西宮神社は今年も従来通り祭礼を執行することになつたが復興は笑顔でと福運を授からうとする人々の参詣は相当多数に上るものと予想されるので、阪神電車では期間中本線西宮駅に臨時乗降口を増設、国道線には西宮札場筋、夙川橋間に西宮戎臨時停留場を設置して終戦後初の十日戎参拝者の輸送に万全を期する」

とある。同じ記事には、さつまいもの販売会の記事、国の力となるため炭鉱へ送ってくれと尼崎勤労署に訴え出る16歳の少年の姿など、時代の様相を感じさせられる。その中で、従来どおり西宮神社は十日戎の催行を行い、国鉄ほどでないにせよ、輸送需要が非常に高かっただろう電鉄会社もそれに応じているところは、この祭が復興のシンボルになるのではと考えてのことだったかもしれない。次の日にはこういった記事となる。（同じく神戸新聞）

「進駐軍もチラホラ　西宮神社の戎祭　西宮神社の宵戎は珍しい温かな日和に恵まれて予想外に人出が多く参詣道の本町産所線道路なども相当な賑はひ、しかし例年に比すれば一割程度といふところ、自由市場の延長のやうに道筋には露店も出てゐるが縁起ものの吉兆屋は数軒に過ぎずそれも一斗樽大の酒樽をつるしたものは全く見られない淋しさ、進駐軍将兵たちの姿もこの店の珍しさにつられてチラホラ見られた・・・」

とある。この記事を見て感じることは、いかに戦前･戦時中の十日戎が壮大なものであったかを感じることができる。それは人々の興味の他に、戦前では十日戎の3日（9･10･11日）は西宮市では休日であったこともあり、多くの人が参拝しやすい状況を作り出していたこともあるだろう。進駐軍がもの珍しさにチラホラという記事には、青年団が声をからして場外整理をしていた戦前とは大違いの風景を生み出している。

1947年（昭和22年）1月8日の神戸新聞にはこのような記事がある。

「えびすさん本殿へ遷御　今年は恒例の一番詣りありません　西宮神社の十日戎は仮本殿の建築完成とともに九、

十、十一日の三日間にわたり復興の機運深まるうちに行われる、年末三十一日の大祓式にあたり仮殿からの木の香の新らしい仮本殿に遷された　仮本殿は工費三十万円で神戸の湊川、生田両神社と同じ型で建築された（中略）南門が破損しているので今年は恒例の一番詣りは行われず早朝から儀式だけが行われる」

御遷へ殿本ん さすびえ
んせまりあり詣番一の例恒はしとこ
西宮神社の十日戎は仮殿の本建築完成と共に九十、十一日の三日間にわたり復興の機運深まるうちに行われる、年末三十一日の大祓式にあたり仮殿からの木の香の新らしい仮本殿に遷された　仮本殿は工費三十万円で神戸の湊川、生田両神社と同じ型で建築された（中略）南門が破損しているので今年は恒例の一番詣りは行われず早朝から儀式だけが行われる

図 4：仮本殿（1947 年 1 月 8 日神戸新聞）

とある。私は、西宮神社の吉井良英禰宜や吉井貞俊前権宮司（現西宮文化協会会長）からも社殿の復興は 1961 年と聞いていたので、この記事を見た時には正直驚いた。現在の本殿とは形はかなり異なり、記事の中にも「生田・湊川と同じ」とある。あくまで仮本殿であるためだったことが考えられるが、この記事の中には「神社の民主化の一端」や「境内の開放を念頭とした中央商店街復興組合の働きかけ」であったとあり、時代を反映すると同時に、社会構造が変化していることの一端を感じさせる。そして「一番詣り」に関しては、南門が破損したためにできないことが書かれており、「早朝から儀式」とある。戦前にあった「忌籠り」の語句は消え、ただ単に儀式となっている。統制経済の中で紙面の関係もあっただろうが、戦前・戦後を経ることで新聞社側の忌籠りに対する意識の希薄化が進んでいることが感じさせられる。

次の日の 1 月 10 日の記事ではこう書かれている。

「よいえびすにぎわう　西宮神社のよいえびすの九日は好天にも恵まれて思いがけないほど参拝人の出足が良く、にぎわいを呈した、境内参詣道には露店、サーカスなどが軒を並べているが吉兆屋は全く数軒に過ぎない寂しさである　この出足をねらって大阪勤労婦人連盟の若い会員が戎停留所で震災義金（昭和南海地震）の募集に声高らかに呼びかけている、往年の混雑もないと見て物々しい取り締まりもなくようやく復興調を取り戻した感が深い」

とある。少しずつではあるが、西宮にも復興の兆しが訪れたという感じであろうか。参拝人の数はまだまだ少ない感じがあるが、翌年の 1948 年（昭和 23 年）には状況は一変する。1948 年（昭和 23 年）1 月 9 日の神戸新聞阪神版である。

「福の神さんも大張切り　手ぐすね引く福あめや吉兆屋（中略）一方西宮神社も本殿脇に社務所もささやかながら復興してはいるが境内周囲のヘイが破損したまま [12]なので恒例の十日戎の福つかみは今年は見込めない　しかし神戸からは恵方にあたつているので参拝は殺到するものと予想されるか両神社（ここでは神戸の柳原神社のこと）ともに正月三ゲ日の参拝人が昨年の倍以上あつたので昔から正月三ゲ日の人出で十日えびすの人出もわかるといわれているので昨年の倍の参拝人はあるものとみられ福あめ、吉兆屋などの露店掛小屋などの整理も進められており、十日えびすの前景気はなかなか活況を呈している。」

そして、十日は「福に集るインフレ戎」（神戸新聞阪神版）とのタイトルで、

「百円札も軽く飛び込み、男女学生、若い人たちの投げ込むのが目立つて多い」とある。次の日の 11 日の新聞では予想を超える昨年の 3 倍の人数（7、8 万人）が参拝に訪れており、戦前と同様の規模ではないにせよ、参拝者に関しては早い時期からの復興がなされていることがここから分かる。ただ、10 日の記事にはこのような記載もある。

「制電が厳しくなって夜は境内燈や露店も電燈を点せないので足もとが暗く夜の参拝はまず懸念せねばならず、したがつて昼間だけに限られるから十日の本えびすの人出は混雑が予想される」

とある。これに関して私は、門開けとの関連も考えてしまう。新聞紙上でも「一番詣り」について言及しているだけあって、新聞読者、もしくは少しでも西宮神社の十日戎を知っている人たちなら、彼らの意識の中で西宮神社の十日戎といえば門開けの一番詣りがあるという事実はなくならなかったはずである。

確かに、神社内を締め切った形での完全な忌籠りは出来ない。しかし、もたらされる結果としては門を開けて参拝客を入れることになり、初めてたどり着いた人は「一番福」だということは強引ではあるが、そう言えるだろう。実際、戦前の一番福の歴史を作り上げた田中太一氏は、戦後は神戸市東灘区（当時は魚崎村）に自分の店を持ち、そこから門開けにはずっと参加していた。実際彼の家族（娘婿）は、1997 年 12 月のインタビューの際には戦後何年かして一緒になって「走っていた」と話された。

「当時は、電気が今と違って点いてないですからね。境内は明かりが無くて暗い。危ないんです。足元が見えないですから。私は走っている時に見えなくて、何かにけつまづいて、こけたことがあります。今（インタビューした 1997 年当時）のようにお酒や米俵がもらえると言うことはなかったですけど、（他の人も）走っていましたよ。私の場合は（義父と）一緒に走らされたと言うのが強い

ですけどね。」

とのことであった。時期としては数年後ではあるが、状況は変わらないだろう [13]。神社側としては、忌籠りが出来ないという物理的な事情と安全面の双方から「一番詣りは、やらない」と通達していたのではとも考える。

その後、開門に関する記事は 1953 年（昭和 28 年）まで今のところ見当たらない。しかしインタビューにもあるように早くに参拝する人はいたようである。その後の昭和 24 年からはこれまで以上に多くの人が来ることとなる。年ごとに特徴的な事象を次に述べたい。新聞ごとに記載に特徴があるので、それも記したい。

1948 年（昭和 23 年）1 月 8 日（朝日新聞阪神版）

「おみくじも景品付今年は二十万のお参りが予想され」

同年 1 月 10 日（朝日新聞阪神版）

「取り戻した人出　西宮のよいえびす」

「境内には客呼びのジンタなどが聞え戦前のにぎわいを取り戻した」

同年 1 月 11 日（神戸新聞阪神版）

「世直しの“福の神”　西宮神社の物すごい人出」

「大黒の福の神みやげ五十円」

「おみくじを買うのは二十歳前後の若者が多く」

「一方で関東だき屋を筆頭に食い物店が子どもたちの人気を呼んでいた」

「阪神電車は五万の乗客をさばいた」

1949 年（昭和 24 年）1 月 9 日（神戸新聞阪神版）

「戦災のため福つかみの一番乗りは行われないが、いつもの通り百余軒の吉兆売り、露店も立ち並び、九日は日曜日になるので一番にぎわうだろう。」

同年 1 月 11 日（朝日新聞阪神版）

「境内数ヶ所に白衣の人たちがにぎやかな出店にはさまれながら傷病者更正資金募集に声をからしてはいたが、金づまりか無関心なのか見てみぬふりの人が多かった」

同年 1 月 11 日（神戸新聞阪神版）

「吉兆、福のお面、福飴などの露店が参拝道から境内まで三百数十軒ぎつしり立並び、バラツクのお粗末な本殿ながらも“どうぞ福を”とお祈りする人々の顔は真剣だ」

「十日に阪神電車の運んだ客は七万数千という記録を出した、同日の人出はざっと二十万人」

1950 年（昭和 25 年）1 月 8 日（朝日新聞阪神版）

「一方灘の銘酒タル詰め一斗以下からくじなしの福引も初登場、景品のエビスの面二万が福寄せの大役に早くも神社で待機、昔懐しい淡路の船頭衆が一家挙げての船参りも今年あたりボツボツ西宮港に現れようとヨイエビスを明日に控え前景気は上々」

同年 1 月 10 日（朝日新聞阪神版）

「神さまもお家がほしいと一枚百円のエビスくじを売出して社殿復興に大きな期待をかける一方、門前では“福アメ”ならぬ“首つなぎアメ”を労働者が売り出しているという一九五〇年のヨイエビスだった。」

同年 1 月 10 日（神戸新聞）

「さい銭もアメも千円時代　景気良く宝恵かご　暖かに福寄せにぎわう」

「吉兆屋、福あめなどの露店がいならぶのにまじり参議院議員補選各立候補者の選挙演説やそれをまぜかえすように昭和重機労組の首切り反対資金カンパのあめ売りの声などが参拝の人人に呼びかけ」

同年 1 月 11 日（夕刊神戸）

「本えびすの十日、西宮神社には朝来の雨もいとわず午前六時の開門を待ちかねてどつと人の波が押し出し」

「社殿復興にえびすさんが今度発行したお酒が当るという神殿復興くじもジャンジャン売れ、目標の百万円にもあと一息」

1951 年（昭和 26 年）1 月 11 日（朝日新聞阪神版）

「西宮のエビスさんは、かんじんの十日が雨にたたられ、この日の人出は五十万の予想をぐっと下回ったが、それでも雨傘の行列が続き、神社側では十数万と見ている。

同年 1 月 11 日（夕刊神戸）

「沿道にカサの波　雨も物かわ二十五万人」

1952 年（昭和 27 年）1 月 10 日（夕刊神戸）

「西宮神社も早朝から人の行列がつづき阪神電鉄でも午前十一時ごろから臨時列車を運行、国電も急行を西宮駅に臨時停車させるなど輸送に大童、神社ではきょう一日の参拝人は四十万を越えるものとみ、戦後はじめての記録だという」

図 5：ＰＴＡ食堂、貸し切りバス（1952 年 1 月 11 月朝日新聞阪神版）

同日 1 月 11 日（朝日新聞阪神版）

「きのう十日はさすが本エビス。午後三時までに三十五万人」

「今年から本殿前のおサイ銭箱のほか、本殿石段下にも十石入りの酒ダルのおサイ銭入れがすえられた。（小学生がそれを盗もうとして逮捕）」

「正門前に浜脇中学のPTAがやっているうどん屋さん一パイ三十円のうどんが人気を呼んで大繁盛。父兄たちも先生もニコニコ顔で客の応接に大多忙」

「解散気構えに備えてか、第二区選出の自由党 H 代議士が参拝者をねらって、西宮電話局横で声をからし、一席ぶっていたが、通行者は無関心の面持ち[14]」

「生野、姫路方面から団体参拝者を乗せ、この日大型バス三台がやつてきた。一人四百円の運賃という。」

「吉兆売れ過ぎ　尼崎エビス　（中略）神様の宣伝はすごいばかりで、初エビスの宣伝を阪神電鉄にかけ合って成功したり、某動物サーカスを頼み抜いて誘致、また某キャバレーとタイアップし、女給さん大勢の出演で「美人舞踊競演大会」を催すなど、客の集るすべはちゃんとつくしている」

このように、復興の過程において、戦前よりあった電鉄・国鉄が西宮において一大輸送手段として復活。1952 年（昭和 27 年 1 月 9 日）の朝日新聞阪神版には

「阪神電鉄にとっては甲子園球場とこのエビスさんが大きなドル箱だといわれているが、それだけに乗降客の処遇に大ハリキリ。現在の駅の西側に二ヵ所と東側に一ヵ所改札口を増設、キップ売り場も数ヵ所増設し、神社側と共に“三日間は雨よ降るな”と今から天に祈っている」

とある。十日戎の本格的な復活は、戦前の参詣電車としての機能も持っていた阪神電車の復興でもあった。西宮以外の戎神社が差別化を図って、キャバレーのダンサーたちを出演させての舞踏競演会や宝恵かごを出すことを行い、十日戎で集客を狙おうと考えている例もあって面白い[15]。

もうひとつ、輸送機関で注目したいのは、以前は官鉄・国鉄が担ってきた遠来の参拝客を運ぶ仕事を、貸し切りバスが担いはじめたことである。1951 年（昭和 26 年）に「一般乗客旅客自動車運送事業法」の改正（貸し切りバスの認可）[16]があり、この形態が出来たと考えられる。この後の 1954 年（昭和 29 年）には西脇からの千五百人をバス十五台で運ぶ話（昭和 29 年 1 月 9 日朝日新聞阪神版）や、特別船でえびす信仰の厚い、淡路や徳島からの参拝客を輸送する、戦前、特に昭和 10 年代に盛んだった輸送手段さえも輸送状態の安定化から復活したことが伺える。

面白いのは、現在の西宮の十日戎ではあまり知名度のない商品は「名物福アメ」ではないだろうか。現在でも露店でも売っているだろうが、西宮の参詣客にとってはあまり知名度の高いものではないのではなかろうか。俳句の歳時記の中に福飴は十日戎に対する子季語として入っており。それを商う屋台もあるだろうが、当時の記事にあるように何軒も摘発されるくらいの販売量はないと思われる。下火になった原因としては、福飴に有毒色素を使っていたとされる報道（たとえば朝日新聞阪神版昭和 29 年 1 月 9 日には「名物の福アメは既報の有害色素の使用にからんで西宮保険所が神社内に臨時詰所を設け、徹底的に検査」など）があり、そこから人気が下火になったことは考えられる。

このころの記事で私が一番面白いと感じたのは、福引やエビスくじ、賽銭の額もさることながら、「公教育の PTA」が境内に露店を出していることである。教員も親も一緒になって「一パイ三十円のうどん」を売っているところは、非常に興味深い。戦前は境内警備としては町の青年団などが活躍していたが、ここの PTA はどのようなことを行っていたのだろうか。露店の場所割に入り込んで、店を開店することが出来ることから氏子組織の一翼を担っていたのではないか。

私の育ちは西宮神社の氏子区域である。小学生のころ、母に連れられて町内会の子ども会で西宮神社まで御輿を担ぐという、いわゆる例大祭に加わっていた。現在でもその例大祭は「西宮まつり」という形で、2000 年から行われており、その中で発展して出来たものとして現在、神輿奉賛講社が存在する。その他の氏子組織としてだんじり（地車）を曳く若戎会などがある。どちらも基盤として小学生位のときより加わって、お神輿を担ぐ、だんじりを曳くというやり方を採っている。西宮という農村地帯ではない産業都市では青年団活動、在郷軍人会活動が祭礼を行うことが多くなった。その例が先ほどの戦前の福男たちの属性である。そしてそれら「新たなスタイルの若衆」をつなぐ役割として小学校や中学校の校区 PTA・子ども会の役割が、当時それを担っていたのではないか。そのように考えると、その後の「福男」たちの関連も考えられるのである。

4、一番詣り、福男の再出現、取り扱いに関して

1953 年（昭和 28 年）に、新聞紙上においては 8 年ぶりに一番福が現れた。田中氏のご遺族が話されるように、その間にも門を開けることは行われ、一番になる人はいただろう。南門の復旧は 1948 年（昭和 24 年）に復興しているが、大練塀の復興は 1951 年（昭和 26 年）であり、これが大きかったとも考えられる。確かに 1952 年の記事は大勢の参拝客が、早朝より詰め掛けた旨が記されている。正式に新聞紙上に再び現れたのがこの年である。その記事は 1953 年（昭和 28 年）の 1 月 10 日の夕刊神戸[17]である。

「百万人突破か　西宮えびす大にぎわい　曇天ながら異例の暖かさに恵まれた西宮神社十日えびすは午前六時の開門と同時に一番詣りを目指す参詣人約千人が正門から本殿まで百メートル競走さながらの激戦を展開、神戸市東灘区魚崎新堀町六九、市来保男氏（二五）が栄冠を獲得、えびすさんの木像をうけてにっこり引き揚げたのを皮切りに・・・」

とある。同じ年の1月11日の朝日新聞夕刊には以下の記述がある。

「西宮神社の「本えびす」は十日朝六時の“赤門あけ”に始った。終電車で泊り込んだ参拝客約百三十人がつめかけ、開門とともに拝殿までかけくらべを演じたが、一番乗りの福男は神戸市東灘区魚崎町新堀、市来保男さん（二五）と決り商品のえびすさんの木像を獲得した」

とある。露店は約千軒、四国からの船参り、お参りにはたっぷり二時間かかるなど、約10年たってようやく十日戎が復興した感がある。ただ記事としては、その前より大きく取り上げられていた日本酒の福引の項に多くが割かれている。朝日新聞では「福男」の語句がここで見られるが、神戸新聞では翌29年にこの日本酒の福引の1等賞である四斗樽を引き当てた男性を「福男」と呼んでいる[18]。

きのう一日で六百万円
▽……さすがに“総本山”西宮神社
福男を引当てた四斗樽

図6：四斗樽を引き当てた「福男」（1954年昭和29年）

紙面の扱いとしても、1955年（昭和30年）代に入る前までは、福引、賽銭、そして少なくなってくるが、福アメやなどがまずは前面に押し出されていた[19]。

戦前・戦時中であるならば、再現されたとなれば真っ先に一面を飾ってもおかしくない内容である。現在の観点から考えるならばではあるが、どちらかと言うと動の部分が少ないこの祭に、生き生きとした躍動感を記事に与えることができる。そこに読者は目を奪われないかと私は感じる。しかし、開門での一番福を選ばなくなってから、新聞紙上に出なかった10年になにが起こっていたのか。これまで挙げた記事から考えると、まずは、子どもたちは「関東（かんと）炊きの屋台に人気（昭和23年）」であり、福引の一等賞は四斗樽の清酒である。その文脈から「福アメ」が流行っていたことも推察される。傷痍軍人の人々、首つなぎ飴を売る労働者、バラックの本殿に集った人たちにとって、身近な福とは、まずは食べ物であり、まずは暮らせることであった。これらの記事が書かれている同じページには、計画停電（制電調整）のことが書かれている。その他配給の記事があり、シベリアの情報、満州からの引き揚げの停止などと、実に生きるか死ぬかの情報が多数書かれている。ある程度多くの人たちの生存権が確保されたのちに、駆け足詣りが新聞紙上でも「市民権」を得て登場した。それが昭和30年代だったと私は考える[20]。昭和20年代にももちろん田中太一氏のような何名かのように一番福を追い求める人もいたであろう。しかし、社会の求めていたものは、まずは生きるための「福」であった。バラック製の西宮神社はその「福」提供していたし、各新聞もその報道を中心に行っていたといえる。

図7：1955年（昭和30年）1月11日　朝日新聞阪神版　（③の写真は市立西宮高校が図書館設立資金獲得のための売店を境内にて開くもの。②の写真は、某代議士のスピーチ。十日戎は様々な人を内包した。）

5、昭和 20 年代後期から 30 年代にかけての福男の特徴

昭和 30 年代以降の開門については次回の論考にしていきたい。ただ、復活期の福男にも戦前の福男たちに見られたような共通した特徴が散見される。

1954 年（昭和 29 年）朝日新聞阪神版では

「なお十日の朝六時開門と同時に、神殿への一番乗りを競う“一番福”は神戸市東灘区住吉町の谷口真佐夫さんだった」

とある。1955 年も同じくこの谷口氏が一番福を取るが、このように書かれている。

「福男･福女　まず第一の福男は神戸市東灘区住吉町恋野一ノ四六、谷口真佐夫さん（二七）住吉中学の体操の先生で走るのが得意、正門から約三百メートルをイダテン走りで見事連続二番福でえびす面付“福みの”を獲得した。ついでの福男は姫路市千羽西新町一一〇、木村仁太郎さん（六〇）はるばる姫路から来たかいがあって午後一時すぎ、えびすくじで見事神戸新聞社寄贈の目の下二尺三寸の真綿製福ダイを引当てて大喜び。この日最大の幸運者は大阪市福島区海老江下二ノ一一、江口忠一氏妻みつえさん（四二）十日えびす呼びもの奉賛会 21)のえびすくじで“えびす賞”四斗樽一丁をせしめた。みつえさんは生れてこの方“えべっさんとは関係がない方で”今まで参ったことが一度もなく、初めて幸運を引き当てたもの。」

図 8 : 1955 年 1 月 11 日朝日新聞阪神版（四斗樽を引き当てた「福女」）

とある。まだ、「福男」の語が新聞紙上において「ただ幸運を受けたもの」でしかないことが分かる。そして注目は谷口氏の職業である。次の年 1956 年（昭和 31 年）では 2 着となり、そして 1957 年（昭和 32 年）の記事（1 月 10 日神戸新聞夕刊）はこのようなものである。

「本えびすの十日、福の神の総本家“西宮えびす”は恒例の門開き神事“福男競争”を行った（中略）一着は西宮市今津山中町、会社員村上精一さん（二一）」二着神戸市東灘区住吉町堂の本六一一山俊雄さん（一九）＝神戸商高三年、三着西宮市宮前町五〇会社員、福井照匡さん（二〇）の順でゴール・イン、木彫りのえびす、大国像をもらった。（中略）昨年まで三年連続入賞の記録を持つ谷口真佐夫さん（二九）＝神戸市東灘区住吉町＝はこの日も住吉中学時代の教え子である一山さんとともに健脚を競ったが、惜しくも等外に落ち、四年連続入賞を逃した。」

図 9:1957 年（昭和 32 年）1 月 10 日神戸新聞夕刊

この後の記録を見ていると、神戸市東灘区住吉の近くの住所の高校生くらいの男性が走っていることが多い。これは、この教え子のつながりで谷口氏が誘って参加させていた可能性が高い。参加者として、戦前ならば地元の消防団や青年団もしくは青年学校などの組織から出場することも多かった。それと同じく、地域の学校の仲間と一緒に参加が、多かったと感じる。1945 年（昭和 20 年）の一番福の上田研蔵氏も勤労動員の出勤途中に学校の友人と参加していたし、1943 年（昭和 18 年）の一番福の東條洋三氏も小学校からマラソン選手であり、地元の小学校では知られた存在であった。上田、東條氏同士もお互いが知っていたとのことで、戦前の参加者のほとんどは見ず知らずの他人ではなく、近くの学校の先輩後輩、もしくは小学校が同じといった、近代の地域的つながりがあったのではないかと考えている。戦争を経て、復活したこの「門開き神事福男競争」においても、戦前と同じような学校のつながりがあったのではと考えられる。ただこの記事にある、学校の先生が主導権をとって教え子と走るというのは、奇抜である。しかし、先述したＰＴＡで 30 銭のうどんや、境内で図書館設立のための露店開きを生徒･教諭が一緒になってやっていた

ことを考えると、これが当時の学校の教員の姿なのではないか。青年団活動に近い活動にも積極的に関わっていたのが当時の主に初等・中等教育の教員だったのではないだろうか。

6、結論、「戦前･戦時中と戦後の十日戎開門神事の相違点」

相違点としては、まず戦後は物理的な要因から忌籠りが出来ず、したがって開門神事が行えなかったことがある。表大門は幸運にも焼けなかったために、門は開くようになっており、計画停電があったにせよ暗闇の中を駆け抜けて、戦前のように鈴縄を真っ先に鳴らし、一番詣りの名乗りを上げることも出来た。実際に田中太一氏などはご遺族の話からその「行事」に参加していたのではないか。しかし認定する側の神社は忌籠りの面からもそれを認めなかった。

そしてもうひとつ大きな点は、やはり時勢の違いであろう。戦前･戦中は開門での一番乗りは、社会の持つ勇士像にも合致し、新聞紙上でも大きく取り上げられやすい。西宮神社でも武運長久の祈祷が行われている。それに対し、戦後では被災をした神社、そして食糧難の時代の十日戎である。参拝に来る人たちは、勇士の姿を求めにくるのではなく、まずは明日の食料、生きる糧を見つけることに一生懸命である。神社側の正式な理由があるにせよ、新聞社が一番乗り競争を取り上げることをしなかった訳がそこにある。

ただ私は、戦前も戦後もこの神事に参加する（門を開ける人たち、走る人たち）主体に関しては、さほど変化はないと考えている。走る側には同じような人が戦前も戦後も関わっている。門を開けるという「走ってもらう側」にしても戦前の青年団などから復興奉賛会とは連関がある。この門明け福男競争の特徴としては、2011 年の現在までにおいても、走る側、門を開ける側を祭事の主体と考えるならば、その場（西宮神社の境内）においては客体化された祭事ではない。現在ならテレビなどの映像メディアによって客体化され、テレビジョンの登場までは新聞記者のペンによって客体化されてきた。なぜなら、忌籠りを行う境内においては精進潔斎を行った神職以外の人間の立ち入りを原則禁じているためである[22]。

目に見える観客の少ない中、参加者たちは様々な思いを持ちながらでそれぞれの「福」をそして拝殿を目ざして走っていた。戦後の門開け行事は戦前同様、比較的自由でありながら、青年団活動や学校といった戦前の 1930 年代にあったつながりを引き継いだまま行われていた。産業都市化がおこった戦前の変化に比べて、戦争がそこまで社会構造が劇的に西宮を変化させたとは考えにくい。明治･大正期を経て、西宮神社の十日戎が、西宮（大正期の西宮町くらいの範囲だろうか）の祭から、大阪からも神戸からも、少し遠く徳島くらいから来る祭へと変化はした。ただそれは、以前からの西宮えびす神社の祭神の信仰されている地域であることにはかわりはない。一番福競争の要素もあるが、参加者たちはある程度「忌籠り」の意味を知って一番詣りに参加していたのではないか。それは多くの参加者が青年団活動や在郷軍人会、そして学校教育活動の属性を抱えたまま参加しているからである。もちろん、1945 年（昭和 20 年）の上田研蔵氏のように「開門までは（スタート位置で）ケンカでしたよ」というコメントもある。ある程度の押し合いがあったことは推測できる。しかしそれは、あくまで拡大解釈した意味での「氏子区域」内でのものであると感じている。主に新聞紙上からの考察ではあるが、書かれ方が 1930 年代から 50 年代までのものと現在の開門神事とでは違うのではという印象は持っている。

これはあくまで仮説ではある。しかし、その違いを感じたのは、私が現地調査をはじめた 1998 年ごろである。門を開ける、もしくは「走ってもらう主体」は見えづらかった。例えば、映像メディアのリポーターは自由に報道が出来たし、カメラマンは何の制約もなく門の梁に登ってカメラを回していた。客体を作る側が「ドラマティックに」主体を作り上げることさえ出来そうな勢いであった。そしてその客体化された「開門神事」を、関西圏を中心とした日本全国の視聴者がテレビにて視聴することによって、主体側にも影響したと感じていた。

これらは時代の流れによる変化である。テレビジョンでの本格的な放映は、大きな変化を生み出したといえる。同時に私が着目したいのは、高度経済成長期を経た産業社会構造の本格的な変化である。これは西宮神社の当神事においても戦災よりも大きいもの遺したのではないか。この仮説を追求･証明するにあたってこれから 1960 年代から 2010 年代という 50 年を見ていきたい。

具体的には①福男の語句の固有名詞化の過程を明らかにする　②「開門神事」と現在呼称されているものの呼称の固定化がいつぐらいから始まったかの同定　③1960 年代の福男へのインタビュー　④社務日誌とともに神社関係者、特に 1960 年代 70 年代の変遷を良く知る方へのインタビュー　⑤各属性へのインタビュー（参加者、電鉄会社、新聞社、メディア関係）などである。これまで対象としては神社関係者、および神事の参加者に偏った取材･研究を続けてきた。そして調べた文献・新聞紙上･社務日誌などもそのようなデータとして見ている向きがあった。軸としては、これまでどおり、参加主体が開門神事を祭として感じられるか否かである。

それに付け足していく形で、これからはその神事を切り取って「マスメディアがより動きのあるイベントへと見せてきた技法」「各電鉄会社の経営戦略」などにも目を向けながらより多面的な開門神事の理解、およびその中で各々がどの様にこの神事を捉えているのかという所に着目したい。

---

1) 荒川裕紀「西宮十日戎開門神事における歴史的変遷」『北九州工業高等専門学校研究報告』　第 43 号 2010/1

2) 1937 年（昭和 12 年）より「連続一番詣り」をしていた田中太一氏、1945 年（昭和 20 年）の一番福上田研蔵氏

の両名は、まさにこのイベントを「年中行事」として認識していた。例えば田中氏であるならば、ご家族の言葉では「亡くなるまで参加していました」や上田氏の「正月もやりますが、十日戎は 3 日とも行きます。これがないと年が明けた気がしない」などの言葉に表れている。

3) 荒川前掲書　p.p.118

4) 鳴尾村が西宮市に合併するのは 1951 年（昭和 26 年）である。甲子園球場や競輪場などからの収入もあり、ほかの西宮市南部の諸地域（大社、甲東など）に比べて合併する際に活発な論議があった。

5) 武藤誠・有坂隆道編『西宮市史　第三巻』1967、西宮市役所　p.p.515

6) 武藤･有坂前掲書　p.p.516-518

7) 武藤･有坂前掲書　p.p.519

8)吉井貞俊『福の神えびすさんものがたり』戎光祥出版、2003　p.p.52-53

9) 西宮神社編『西宮神社』2003、学生社　p.p.96-100　によると､中世･近世には西宮神社は戦火に何度も遭っていることが分かる。文献から分かる記述だけでも 1534 年正月に戦火により社殿消失､1578 年荒木村重の乱によって消失、開門神事で重大な役割を果たすことになる表大門が建てられたのはこの乱の後であり、1609 年（慶長 14 年）と考えられている。しかし、1653 年（承応 2 年）の失火で再び社殿が焼けてしまい､1663 年に徳川家綱の造営するところになったとある。戦災復興の後も 1995 年（平成 7 年）1 月の阪神大震災によって本殿が倒壊したが、その年内に修理された。

10) 西宮神社編前掲書　p.p.136　修理は昭和 25 年から 1 年半にかけて､文化財保護委員会の手によって行われた。その際に練塀の中より元銭･宋銭が発見され､そこから構築上限年代の判別がなされた。その点と文献からの西宮神社が隆盛を極めたと考えられる時代的背景を考慮して、この大練塀が室町初期に構築を成し遂げたのではないかと考えられている。「忌籠り祭」を考える上においてもこの構築年代は非常に重要である。

11) 荒川前掲書 p.p.113　昭和 14 年 1 月 11 日大阪朝日新聞阪神版の中で田中氏は「数日前から不快で出場が気遣はれていたが颯爽たる青年団服を着て」登場し､多司馬園之助氏は「すぐる上海事変に出動した工兵上等兵で現在在郷軍西宮分会の役員をしてゐる」とある。練塀に関しては､『西宮市史　第三巻』には 1945 年（昭和 20 年）の 12 月に辰馬氏などの地元名士が集まり、西宮史談会有志として応急処置に要する資金着手を行ったとある。(p.p.538) この後も国費による大修理が行われるまでしばしば風雨による損害から守るために市民の熱意によって練塀は維持されてきた。国費による大修理の開始は 1950 年(昭和 25 年)の 9 月 18 日のことである。

12) 練塀に関しては､西宮市前掲書『西宮市史　第三巻』に 1945 年（昭和 20 年）の 12 月に辰馬しなどの地元の名士が集まって、西宮史談会有志が応急処置に要する資金着手を行ったとかかれている (p.p.538) この後も国費による大修理が行われるまでの間しばしば風雨による損害から守るために市民の熱意によって練塀は維持されてきた。国費による大修理の開始は 1950 年（昭和 25 年）の 9 月 18 日のことである。

13) 現在では、明かりが非日常感を作り出す 1 つの要素になっている。その明かりは、門が開く際に新聞社の数十台いるカメラから発せられるフラッシュ、参詣道での実況中継のためのライトなどもたくさんある。昭和 30 年代の新聞記事には開門の際の写真が多く見られることから、現在と同じようなストロボフラッシュを感じて、走るということはあっただろうが、昭和 20 年代にはそういった記事写真は見当たらず、暗闇の中の疾走であったことは想像できる。

14) 私が調査を始めた 1990 年代にもこの代議士の十日戎の辻説法は行われており、風物詩でもあった。

15) 実際、この神社も阪神尼崎駅からの至近距離にあり、商店街にも近接した西宮神社同様の立地条件がある。その他にも同じ阪神沿線沿いには野田のえびす、阪急宝塚線には豊中えびす社と現在でも電鉄との関連が深いえびす社が多数存在する。昭和 29 年 1 月 9 日の朝日新聞阪神版には「尼崎えびすは向こうが西宮えびすは「西の宮」こちらこそ本家だと今年は「本戎祭」と大書したノボリ三百本を境内に建てて“東家”の威容を示そうという」とある。阪神電車の乗客は、大いに注目しただろう。

16) この法令に関する話を最初に聞いたのは､四国遍路の研究の際に、伊予鉄バス巡拝センターの取締役部長田中國廣氏からであった。この法令は四国遍路においても画期的なものであり、貸切巡礼バスの始まりは 1953 年（昭和 28 年）の伊予鉄道による新型ボンネットバスによるものであった。当時の動きを寺院側から見ていた一番札所住職の芳村超全氏によると「あれ、お遍路はんが、バスに乗ってきおったで！」と驚きの声で迎えたことのことであった。同じ動きが同時代の参詣対象である十日戎にあったことは当然ではあるが、興味深い。

17) この同じ記事に神戸新聞社は福ノ神の祭りの“十日エビス”に時を同じくして創刊 50 周年「走る一千万円の幸運、大福引の豪華商品」としてトヨペットなどの自動車があたるキャンペーンを開催しており、そのパレードを神戸から阪神地域にかけて行った。時代的に朝鮮戦争の特需景気のころで、エビスとあいまって当時の景気のよさが紙面から溢れている。

18) 神戸新聞はこの後も一番参りの勝者には｢福男｣の語を、数年間使っていない。朝日新聞でも 1953 年には使っているが、そのあと 2，3 年は出てきていない。次回の論考でどこの新聞がはじめに出し、そしていかに広まっていったのか、そして 1955 年（昭和 30 年）以降の紙面での扱われ方、用語の変遷を見ていきたい。

19) 昭和 30 年の 1 月 11 日朝日新聞阪神版の記事で気になるのは、PTA 組織ではないが、市立西宮高等学校の出しているブースの写真である。そこには「図書館建設資金をかせぐ市立西宮高校の売店」（図 7）とある。現在の十日戎でも NGO の団体が募金を行ったりすることがあるが、基本的には露店という形では入り込んでいない。以前に JT がタバコの販売促進を考えてブースを出しているのは見たが、このような公教育の機関が積極的にブースを出して学校の経営を支えると共に、学校組織として祭りに参加し地域社会の一翼を担っている点が、現在とも異なるだろうし、戦前の学校の形態にもないのではないか。先ほども述べたことであるが、公教育が地域社会をより実際的に担っていたのがこの 1940 年代後半から 50 年代前半なのかもしれない。公教育からみた地域社会への還元については、議論がたくさん出ているが、この当時のような非常に実際的な還元の歴史について調べていくことも大切である。

20) もちろん昭和 30 年になっても、食糧問題は解決されていない。例えば、福男･福女が出ていることが報道される中、尼崎の薄井市長は「欠食児童救済運動の陣頭指揮を取り、まずは失業者を減らすこと」と述べている。

21) この奉賛会は西宮神社復興奉賛会と言い､開門も行っていることが、その後の新聞で書かれている。戦前の開門行為は、青年団だったことから、この 2 つになんらかの関連性があると考えられる。これからの調査課題である。

22) 現在、報道の加熱によって映像メディアのスタッフが、この忌籠り中の境内に入り込むことが常態化している。神社としては、報道のためでもあり、必要ではあるが参加者などからこの状態に関しては異を唱える人も少なからずいる。

（2011 年 11 月 7 日　受理）